

もっていた。とはいえ、病は日ごとに重くなり、今年の夏、入院し、間もなく他界した。

察しがいいということは、同僚に対してだけではなく、配慮は職員にも及んでいた。学校においては、教員と職員は車の両輪のごとし。この類のことを口にする人がいないわけではないが、その実を鈴木さんは行為においてあらわした。

いま、ぼくは思う。ぼくは彼と対立したことがなく、対立によって生ずる心中の葛藤に悩まされるということもなかった。雑なるぼくにとつて、彼の純はいわば「水」であった。濃い味はなく、味は淡く、その良質な水はぼくには極めて貴重なものであった。

東京のあちこちにまだ焼け跡がなまなましく残り、戦火の激しさを想起させるあの頃、長身の丈夫じょうぶとして校庭に立つ彼とぼくは会った。以来四十年あまり、ぼくらのあいだは淡い流れとしてつづいたが、今年七月、流れは切れた。丈夫は逝き、懦夫だふは残った。とはいえ、いまでも、研究館の、廊下のむこうから、片手を軽くあげながら、笑顔で近づいてくる姿、その姿があらわれるのではないか、とふと思つ一瞬もあるのだ。

(付記 本誌に掲載する文章として「ぼく」という一人称はふさわしくないだろう。しかし、〈我と彼〉で徹

底する文章を書くことはできなかった。〈我と君〉の想いを抑えることはできなかった。やむなく「ぼく」を用いた。読者と編集者の寛恕を願う。)

## 鈴木先生を悼む

坂口博規

七月二十六日早朝、鈴木先生の訃報に接した。前日より病状が思わしくないと連絡は受けていた。落胆と悲哀に、俗に言う、頭が真っ白な状態になった。「またイイヒトが早く逝っちゃった」。その時、ただそればかりつぶやいていたように思う。呆然とし、次に激していた。日頃の御引立に何も応えられないまま、先生を冥界へお送りする自分に腹が立った。悔やむというより、腹が立った。

今まで何人ものイイヒトと幽明の境を隔てた。それもまだままだの人生を、御仕事をと望まれた方と。前任校で、国文科の主任だったS先生。静脈瘤破裂などで長く闘病を強いられた方だった。S先生の「僕も元気だったらねえ、も

つと学生のために……」という弱々しい言葉が、今も耳に残って消えない。

そして、鈴木先生。「元気だったら……」、やはり先生からもお聞きした。昔の、大きな体で、大きな声でいらした先生を知っている。その時の先生の御心中は、さぞ御無念であつたのだらうと思えてならない。学生をたいそう愛していた。博学でいらつしやつた。授業が楽しかつたと、学生の多くが言つていた。もっと多くの学生に、我々に、学ぶことの楽しさをお与え下さるはずなのに……。

先生は誰よりも駒沢ナシヨナリストだつたと思う。愛校心が強かつた。それも偏狭なナシヨナリストではなく、駒沢を愛する者なら誰とでも、その愛する喜びを分かち合おうとされていたと思う。同窓の友人・知人の方々に、「学園通信」を発行の度にずうつと送つていらしたそうだ。これも、そうした愛校心故のことであつたと思われる。

私には、ついで思い付かぬことだつた。それをお聞きして、私も、この駒沢で青春の貴重な一時期を過ごした、その共通の思い出を、遠く大学と離れた友人達と、もっと心一つに感じ合うべきであつたと反省した。今の駒沢大学の様子を伝えることで、友人達に、いつも大学を身近なものにさせてあげるべきだつたと悔やまれた。私もやってみようと思つた。

決意してから後に「学園通信」が発行された時、私はそれを忘れて、機を逸した。志は頓挫した。所詮は鈴木先生には及ばぬことだと、自分を慰めてみるが、情けない。しかしやはり私もナシヨナリストでいたいと思う。自分に無理のないところから、何かを始めねばなるまい。

私の書斎の書棚の一角に、以前台湾で求め魂入れしたもつた十一面観音像が納めてある。そこへ、私の祖父母、父、義父、前述のS先生、やはり前任校の、学生課で兼務していた時の課長だつたS先生、その他お世話になつた故人の、写真や手紙など縁のものを納めている。毎朝、水をとにかえ、線香を供えている。そこに、以前いただいた鈴木先生の手紙をお納めした。

先生が御逝去されて四カ月、今はただただこれまでの御指導に違わぬようにと誓い、御冥福をお祈りするばかりである。